



大方あかつき館報

第16号
2010年3月発行

あかつき

故郷を愛し続けた

不屈の作家 上林暁

宮川 昭男

(一) その生涯

作家上林暁は本名徳廣巖城^{いわき}、明治三十五年黒潮町（旧大方町）下田の口に生まれ、昭和五十五年満七十七歳で亡くなりました。

生涯に四百編ほどの小説と約千編の随筆・評論・感想を残していますが、それぞれ約百編、計二百編ほどの作品は郷土関係の作品です。絶筆「秀夫君」も、郷

土の先輩の息子さんのことを描いています。「故郷を愛し続けた作家」といわれる所以です。

また、その生涯は、戦争・貧窮・妻の病と死・自らの病苦など苦難の連続でしたが、屈せず、その苦難を糧とし、文学一筋の道を貫いたのです。まことに、不屈の作家魂の持ち主であったといえるでしょう。「自らの惨苦を見すえた不撓の作家」といわれ、「最後の私小説作家」ともいわれています。

六十歳の時、二度目の脳溢血で倒れ、右半身不随のまま約十八年間も書き続けるのですが、それを献身的に支えたのは、妹・睦子さんでした。睦子さんは、『兄

の左手』にこう書いています。

兄は死の四日前まで書きつづけ、十九枚の原稿が残された。

それは、ほとんど全部、字というより文様とか記号に近い。というより、まだ字を知らない幼児のいたずら書きと言った方がいいかもしれない。一枚わずかに三、四個しか字になっていない。一面全部字になってないのもある。

それは壮絶とも言える。

一段と衰弱が加わった兄が、息づかいも荒く、不自由な身体を波打たせながら、最後の力をふりしぼり、文字にならない文字を書き綴る姿には、鬼気せまるようなものがあつた。

(二) 碑のこと

碑を一基建立するには、碑文や場所・石の選定や資金の調達など、多くの人々の協力なくしてはできない大変なことです。が、上林さん（以下、親しみと尊敬の念を込めてこう呼ばせて頂きます）の碑は、現在全国に七基あります。

一番新しいのは、西南大規模公園・黒潮パークゴルフ場入口横に平成十八年五月に建てられた「蠣瀬川畔の文学碑」です。碑文は随筆「蠣瀬川懷郷」から採られており、上林さんの人と文学の根源にあるものを味わい深く表現した名文です。

僕は郷里にかえる度に、うし／ろの岡に登って、草径を歩いた／り、海や川の眺望を楽しんだり、／蠣瀬川の堤防を歩いたり、浜へ／出て行ったりするのが、唯一つ／の楽しみである。

僕が今日、兎も角も文学者と／して在ることが出来るのは、こ／これらの風物のお蔭であるが、僕／の文学がいつまでも故郷臭さか／ら抜け出られないのも、またそ／の為である。

その他に、「四万十川の／青き流れを／忘れめや」という為松公園の文学碑、「梢に咲いてゐる花よりも／地に散つてゐる花を／美しいと思ふ」という入野松原の文学碑をはじめとして、天草の旅館岡野屋、中村高校、田ノ口小学校、延光寺などに建てられています。

碑だけから考えても、上林さんがいかに多くの人々から敬慕されているかが知られるわけです。

(三) 人と文学―総論

上林さんは、下田ノ口尋常小学校（現田ノ口小学校）・県立第三中学校（現中村高校）・熊本第五高等学校（現熊本大学）を経て、東京帝国大学（現東京大学）英文科に入学、昭和二年二十四歳で卒業、改造社に入社、翌年結婚しています。

昭和七年、二十九歳の時、「薔薇盗人」を川端康成に褒められ、新進作家として注目されますが、昭和九年、一家で帰郷、あしかけ三年の間故郷に寄寓、〈蟻地獄〉の苦しみを味わいます。

昭和十一年、三十三歳の時、覚悟を決めて一家で上京、元旦から遺書のつもりで一日原稿用紙一枚ずつ書き六十枚の「学校」を執筆、翌年・昭和十三年に発表した「安住の家」が文壇で高い評価を得、私小説の道が開けます。

昭和十四年、三十六歳の時、妻が発病し、七年間患った後、昭和二十一年に亡くなりますが、その年に「聖ヨハネ病院

にて」を発表、臼井吉見に激賞されます。昭和三十一年、五十三歳の時、一連の病妻物が「あやに愛しき」という題で宇野重吉監督によって映画化されたりもします。

四十九歳で一度目の脳溢血を発病し、三年間禁酒。昭和三十七年、六十歳の時、楽しみにしていた三十九年ぶりの熊本をはじめとした九州旅行直前に倒れ、右半身不随となりますが、以後亡くなるまで、妹睦子さんの献身により「白い屋形船」（読売文学賞）・「ブロンズの首」（第一回川端康成賞）などの作品をいくつも発表します。

生涯の主な作品は、この他「ちちははの記」「死者の聲」「春の坂」（文部省芸術選奨励賞）「梧桐の家」「天草土産」「四万十川幻想」「小さな蠣瀬川のはとり」「過ぎゆきの歌」「小便小僧」「野」など多数あります。

上林晩のペンネームが熊本五高時代に住んでいた上林町に由来していることでも知られるように、上林さんは熊本を「第二の故郷」と称し、「熊本びいき」を自認していました。そして、終生熊本を懐かしみ、熊本関係の作品は二十三編を数えます。

また、上林さんは、熊本五高卒業の年、大正十三年の元旦、故郷入野の浜で「どんなに不遇で、つらいことがあるうとも、文学をもつて貫こう」と誓いました。そして、不屈の作家魂と努力、忍耐によって様々の苦難を克服し、妹睦子さんの献身に支えられながら、死の直前まで書き続け、初志を貫徹したのでした。

作品を「遺書のつもりで書き始めた」といい、その一つ一つの作品は魂を込めて書かれており、「七度生まれかわるとも、文学をやりたい」ともいつています。上林さんは、まさに「文学の鬼」であったのです。

しかしながら、上林さんの文学は上林さん一人で成立したものではありません。妹や妻達を犠牲にした上に成り立っている文学です。上林さんがそのことを深く自覚していたことは、次の言葉でも知られます。

妹を不幸にしたのは私である。私は文学をやるために妻を犠牲にし、返す刀で妹を犠牲にしたと言われている、返す言葉がない。私は時折断腸の思いがする。（「開運の願」）

上林さんは、俳句も作り、『木の葉髪』という句集も出版しています。次の句は、上林さんの人生を象徴する代表句といえるのではないでしょうか。

文芸に一世を賭けし木の葉髪

最後に、上林さんと親しかった河盛好蔵の弔辞を引用し、結びとさせていただきます。

上林君、あなたと共に伝統的私小

説の砦を守ってきた尾崎一雄さんは、あなたの計をきいて、「本人は人生からいじめられていたようなものだが、ひねくれず善意の人生肯定派だった。えらい人だった」と話しておられます。僕も全くそう思います。あなたは流行作家にはなりませんでしたが、あなたの心からの愛読者は日本国中に広く散らばっています。上林文学は不朽です。

上林君どうか安らかに眠って下さい。

昭和五十五年九月二日

河盛 好蔵

〈追記〉

上林暁さんと同時代に、黒潮町（旧大方町）を故郷とする偉大な作家にもう一人タカラテルさんがいます。タカラさんの墓は、鞭の丘にあり、最近、浮津の国道五十六号脇に「あらしは／つよい木を／つくる」というりっぱな文学碑が建てられました。

同時代に同じ町から、日本の文学史に残る偉大な作家が二人も出ることは、非常に希なことといわれます。

私達は、この二人のことを誇りに思うとともに、その作品を読み、もっともっと二人のことを大切にしていこうではありませんか。

二人の作品集は、大方図書館にありますし、上林暁文学館には、上林さんの絶筆の生原稿をはじめ、たくさんのご貴重な資料が展示され、みなさんご来館をお待ちしています。



平成21年度の催し風景

図書館企画展

5月2日(土)、ワークショップ「あべ弘士さんと絵をかこう!」を開催しました。

町内外から52人が参加し、絵本作家のあべ弘士さんと一緒に、ゾウやウサギなどの動物の絵を描きました。



第九回上林曉忌短歌大会

7月30日(木)、第九回上林曉忌短歌大会が、黒潮町保健福祉センターで開催されました。

県内外から130人の出詠者があり、52人が参加した短歌会では、選者で中部短歌編集委員の古谷智子さんによる講演と作品の講評、入賞作品の表彰が行われました。



第47回大方の秋まつり

11月14・15日(土・日)、ふるさと総合センターと大方あかつき館で、町の総合文化祭として町展や舞台芸能・お祭り広場での出店などが行なわれると共に、健康ウォークも同時開催され、たくさんの人たちで賑わいました。

